

「河川敷保全と利用の方向性について」の意見書

淀川水系河川整備計画の策定にむけて 淀川に「原野」の軸を

佐藤治雄

2003年11月2日大阪地区・淀川下流円卓会議参加

いうまでもなく、新淀川は明治時代に旧中津川の流路にそう形で開削された人工河川で、これは、数年おきにおこる河川の氾濫によって維持されてきた淀川河口部の広大な「原野（げんや）」という自然を、新しくつくった2本の堤防の間（堤外地）へ押し込めたことにほかなりません。このことにより大阪平野部の土地が安定し、今までの河川の氾濫により阻まれていた土地の開発が促進され、都市の発展に大きく寄与したことは論を待ちません。

「原野」ということばに対しては、人間の生活と厳しく対立する、人間にとって不必要なもの、あってはならないものという印象を持つ人が少なくないかも知れません。しかし、決してそうではありません。「原野」は、人間の関与が少ないがゆえに維持されてきた、実に豊かな「自然」そのものなのです。この自然は、数年おきにおこる河川の洪水や氾濫による地形や植生の変化という、「不安定な環境」に依存した多くの動植物の生存環境でありました。

2本の堤防の間に押し込められたとはいえ、淀川の「原野」という自然は、河川の増水にともなう攪乱によって曲がりなりにも維持されてきましたが、この自然が致命的ともいえる圧迫を受けたのは、淀川の改修計画による河川断面の変更、及び天ヶ瀬ダムや淀川大堰による淀川の洪水調節機能の増大による堤外地、とくに高水敷の安定化でした。すなわち、淀川高水敷が、河川水位の上昇による冠水や、まして地形の攪乱を受けることがほとんどなくなった結果、国営淀川河川公園に象徴されるように、人間による高密度な利用を可能にしてしまいました。その結果、淀川の上流から下流まで、原野と呼べるような環境は著しく減少し、かわって野球場や芝生地など、本来の自然とはかけ離れた、人間のためだけの環境が多くなってしまいました。

私は、これらの野球場や芝生を今すぐ無くすべきだというつもりはありませんが、淀川河川敷に本来存在していた「原野」という自然が多くの野鳥をはじめ昆虫や野生植物を擁し、その自然性の高さ故に人間生活に計り知れない豊かさを与えていることを再認識する必要性を指摘したいと思います。とくに淀川大堰より下流の地域は、大阪湾の潮の干満の影響を受け、この部分に少し手を加えることにより、昔の原野に近い自然環境を復元することは比較的容易だと思います。このことにより、琵琶湖から大阪湾に至る「原野」という密度の高い自然環境の軸を再構築することができ、この軸を拠点に、現在、自然が無くなった市街地の中へ多様な野鳥や昆虫を導くことができます。

このことは、自然とのふれあいに乏しく、身近な生き物に対する知識や感性が欠如しがちな子供たちに対し、「命」、「自然」というものに対する認識を深めるきっかけをあたえ、より豊かな都市生活を構築するモーメントとなるに違いありません。

「都市と自然」334号 2004年1月号より転載